

戸外生活の指導

堀合文子

幼稚園の生活を戸外での遊びと室内での遊びとに分ける事も出来る。梅雨も上れば戸外での遊びが活潑になるだろう。

もすべて同じ遊びの場なのである。

遊びと室内での遊びとに分ける事も出来る。梅雨も上れば戸外での遊びが活潑になるだろう。

戸外遊びというと遊具を用いた遊び、かごめ、鬼ごっこ等の団体遊び、砂場あそび、草つみ、水あそび等自然対象のあそび等々が頭に浮ぶが、今戸外遊びを、ある角度から眺めて考えてみよう。

幼児の遊びは、家庭の延長であり、室内、戸外を区別せず、大なる活動、小なる活動が絶えず続けられている。室内で仕事して、戸外で活動するとは限らない。幼児にとつては室内も戸外

砂場遊びは、大なる筋肉を充分に活躍させて、粘土製作と同じ砂場製作は常に創作されている。三才児の創作がそこに表現されている。室内で製作された作品はそのまま玩具として、園庭をかけまわつたり又池へ舟を浮ばせる等活用して戸外の遊具として遊んでいる。

園庭を散歩する。自分達の栽培した植木を世話する。飼育している動物を世話する。庭の椅子に腰かけて、友達の遊びを眺める。特殊な状態に幼児をおいてみると、誰でもが観察の目的と考えるが、勿論観察だが、幼児はこのような状態におかなくとも、園庭で友達と鬼ごっこしておいかけたり、おいかけられたりしていく。フランコを一しようけんめいこいでいても、常に園庭の自然の観察は行われている。室内で食事していくも、窓から入口からも戸外は観察されているのである。このように幼児の生活は戸外遊びをとわざ遊びの中に知識を得、遊びの中で身心共の発育をしているのであるから指導する私共も、計画の中におしこめず、計画のために幼児を動かして幼児の生活を束縛しないよう努力しなければならない。

したがつて幼児が室内にいる時は計画の中に生活させ、戸外にいるときは幼児に自由な遊びの生活をさせるという区別は不可能なわけであり、戸外遊びをそう区別して考えたくない。

○ 戸外での私共の位置の反省

太陽が美しく輝く下で子供達と鬼ごっこをする私共。すず風の吹

く緑蔭で子供達相手に絵本をよんだり、囲まれてお話や紙芝居をしている私共。木蔭でござを引いてままで遊びのお客様になる私共。

汗をぎらぎらさせながらかけっこしている幼児達の応援をしている私共。草が青畠のように生えていた草むらで、摘草したり、首飾、腕輪を一しようけんめいに作っている私共。幼児達と一緒に太鼓橋へ上つている私共。ブランコを一しようけんめいに押している私共。等々々々。

幼児対私共はあらゆる美しい絵を幾つか作り出している。自我を忘れて遊んでいる。四才、五才児になつて遊んでいる。その遊びの中で幾人か又は組全部の個性に接觸しているのである。Aさんがいつも我ままな所を出して友達と衝突した。Bさんが道徳的に反した行動をした。Cさんが皆と昨日した約束が守れなかつた。Dさんはいつも乱暴なのにやさしい所を見せた等、種々の問題や種々の個人にぶつかる。その場合、それぞれ、その個人個人に適した指導と処理がそこに下されなければならない。

鬼に追かけられて一しようけんめい逃げてばかりもいられない。太鼓橋やジャングルに夢中で上つてばかりもいられない。私共の神経は常に瞬時も休みなく多忙である。

ある時は幼児の母になる。ある時は友達になる。ある時は姉にな

る。ある時は先生になる。

その場、その場、その人、その人によつてこの変化を適宜に実行しなければならない。

○ 指導の着眼

このように私共の位置を反省してみると、

□ □ □ □ 組の幼児の個性を常によく心得て知る。

□ □ □ 機会をとらえて指導する。

□ □ □ 遊びも遊具も創作性のあるものを選択する。

□ □ □ 幼児の遊びをよく観察し、遊びの中から指導すべき計画を取り出し幼児の遊びをより発展させる。

□ □ □ 私共の立場も常に指導の立場ばかりでなく、年令に応じて私共の立場も考慮する。

これは三才児、四才児は比較的私共が先に立つて遊びを指導しなければならないが、五才児、四才児の終りにもなると、自分達で遊びのグループは出来ているので、私共は五才児の友達になつてその遊びに入れてもらわねばならない。その点私共の位置は年令に応じて変えられねばならない。

以上は、前にも述べたように戸外遊びだけに考え方ではないが、幼児の遊びの相手をしたり、遊んだりするだけの戸外遊びではなく、むしろ一日の中で一番大切な時である事を更に再認し、戸外遊びの種類の羅列には触れなかつたが、幼児と共にいる戸外遊びの機会が如何に大切か、指導を反省する材料になれば幸です。